

伝についてかなりの知識を有していたと思われるのである。

以上を踏まえて、『政事要略』巻六十一「聖徳太子伝」を読み直してみたい。この「聖徳太子伝」は『日本書紀』『伝暦』を中心に、『異本上宮太子伝』他の取り合わせで文章が構成されている。しかしながら『政事要略』は、基本的に引用する書名を最初に掲げ、節略することはあっても、内容を改変することはない。引用書物は時代順に並べ、同じ内容の書物を数種類取り上げる場合には、成立年の古いものを主とし、その他の書物は補足的に用いている。そこで「聖徳太子伝」を詳細に検討すると、その内容から八段落に分けられるのだが、『日本書紀』の記事を中心として、『日本書紀』に見えないエピソードのみ『伝暦』が採用され、『政事要略』の基本姿勢に近い。さらに、今まで『伝暦』以外の太子伝と思われる『三寶絵』や『日本往生極楽記』などの太子伝（これらも『伝暦』の趣意文と見られている）と共通していること、『伝暦』も写本によってそうした痕跡を残しているものがあることから、現行本に先行する原『伝暦』が存在し、『政事要略』は原『伝暦』と『日本書紀』の二本から允亮によって書かれたと考えられるのである。

一方武田本奥書で寛弘五年に允亮が読んだ「此伝」は、この奥書が上巻にあることから、やはり現行本であったと考えたい。寛弘四年には僧清義が住していた四天王寺で『御手印縁起』が発見されるなど、この頃太子信仰はにわかに盛り上がりを見せる。おそらく

平成一五年度早稲田大学史学会大会報告

は『伝暦』もこの動きの中で大きな変化を迎えており、上述した允亮と『伝暦』との関わりは、まさにこうした『伝暦』をめぐる動きを如実に表しているのであろう。

## 石橋湛山と戦時下の経済人脈

上田 美和

本報告では、一九五六年に首相となった、石橋湛山（一八八四～一九七三年）の人脈を、主に十五年戦争期について検討する。石橋の政治活動の支持基盤がどのように形成されていたのか、彼が率いた『東洋経済新報』（以下、東洋経済と略記）は果たして戦時下の「孤高の言論」に過ぎなかったのか、を再検討するため、主に経済人脈面から具体的に検証したい。戦前のジャーナリスト時代と戦後の政治家時代との包括的考察を今後目指すための試みである。便宜上、彼の人脈を整理すると、（一）ジャーナリズム（二）学界（三）財界（四）政界に大別できる。

まず、（一）には、経済記者の地位上昇の契機となった金解禁論争以来の「街の経済学者」仲間の、高橋亀吉、小汀利得、勝田貞次、山崎靖純や、戦時下、社外から寄稿した清沢洌、伊藤政徳、長谷川如是閑らがいる。

（二）には、高垣寅次郎、塩野谷九十九、脇村義太郎、鮎沢巖らがいる。金融制度研究会（一九二二～二七年）、三井銀行金融研究

所からの寄付で運営された通貨制度研究会（一九三二～三三年）、ケインズ研究会（一九三八年）、東洋経済研究所（第二次通貨制度研究会、一九四〇～四二年）、金融学会（一九四三年）は、石橋が創設の中心的役割を果たした。一九四一年五～六月に東洋経済誌上に掲載された石橋の「広域経済と世界経済」が七月、出版文化協会で問題となり、翌年、東洋経済研究所による『広域経済の通貨問題』は印刷されたが公刊中止となった。金融学会は安田銀行頭取を務めた森広蔵が研究資金の募集に尽力し、大口の予算通達は会員である各大銀行から寄せられた。脇村は戦前からの長い付き合いで、石橋が総裁となった一九五六年自民党総裁選挙では、三木武夫と石橋の連携画策、また財政的支援のため、関西紡績連合会の取りまとめに尽力した。

（三）には、志村源太郎、杉野喜精、有賀長文、瀬下清、武藤山治、志立鉄次郎、明石照男、徳田昂平、大河内正敏、深井英五、小林一三、池田成彬、鮎川義介、松永安左エ門らがいる。彼らの多くが一九三一年に設立された経済倶楽部のメンバーであり、広告提供者として戦時下の東洋経済を支えた。経済倶楽部は「経済の実務と学理との連絡」を目的としたサロンで、講演会が盛んであった。全国に支部も広がり、石橋は精力的に各地へ講演に出向いた。また、石橋は戦後の財閥解体に基本的に反対の立場であり、『石橋湛山日記』にも「残酷の感あり」（一九四五年十一月七日）という感想を残している点に留意すべきである。

（四）について、戦前から親交のあった政治家に、町田忠治（東洋経済新報社の創設者）、松岡駒吉、植原悦二郎、大口喜六、田川大吉郎らが挙げられる。

石橋は政界入りの決意を一九一四年四月一日時点で記していたが（『石橋湛山全集』第十五巻）、自由党からの総選挙出馬は松岡らには驚きであったことがわかる（前掲日記一九四六年三月一三日）。また立候補の経緯で徳田昂平や小林一三が一役果たしていることが、前掲日記と『湛山回想』から判明する。政治資金の調達に奔走したのは、東洋経済会長を務めた宮川三郎であり、一九五六年総裁選での石橋への大口寄付者に松永安左エ門、堤康次郎、桜田武があり、経済倶楽部会員の小口寄付が加わったとされる。松永は経済倶楽部設立当初からの会員で、石橋の追放解除、政界復帰頃までには相当親しくなっていた。

こうした、戦時下の人脈と、戦後の政治活動への連続性や影響についての判断には注意を要する。例えば、経済倶楽部内で主要な会員であった鮎川義介との関係は複雑である。戦時中、鮎川が石橋らの退社を条件に、東洋経済新報社とダイヤモンド社とを合併買収したいと申し出た際に、「巧妙に反撃して立消えとなった」（『東洋経済新報社百年史』）という経緯がある。その一方で、前掲日記一九四六年一月二日には、鮎川ら「戦争犯罪嫌疑」を受けた財界人弁護の件で立ちまわった事実がみられる。また、前述通貨制度研究会への資金提供に協力した池田成彬について石橋は、政党や「自由主義

分子」への援助を拒み、ファッショに迎合したとして批判している（一九五〇年東洋経済新年号）。さらに、講演集『経済倶楽部講演』からは、倶楽部内でも政治的立場の差異がかなりあることが伺える。このように、人脈を形成した各人と石橋との親疎の程度については、今後一層の検討を要する。

## 城館から見た豊臣期の奥羽

松岡 進

豊臣期における城わりの展開と織豊系城郭の広まり、それらが印象づける下剋上の終焉と新たな権力者の武威の誇示、といった城館をめぐる事象は、時代の象徴ともいえるイメージを提供している。奥羽についても、小林清治氏の所説を代表として、私の城から公の城へ、という変化を認め、平和に対応した城郭政策の起点として、戦国との断絶を強調する見解が一般的である。しかし私は、奥羽各地に残された城館跡を歩き続けるうち、このような理解が立脚している、戦国期城館は在地領主支配と密着して存在していた、という前提に疑問を持つようになった。居城を基軸とするこれまでの研究で重んじられてこなかった臨時的な城館に着目すると、戦国末期の主要な城館はすでに大名の軍事政策を反映した公的なものであったと判断される。そして、それらと重なり合って、在地の多元的な必要に応じた実に多様な城館が存在していた。以上の視点からは豊臣

平成一五年度早稲田大学史学会大会報告

期の奥羽をどのようにとらえ直せるであろうか。

関ヶ原合戦の決着がついた後、上杉方の直江兼続に領内を席卷された最上義光は、秋田実季あて書状の中で、苦戦の原因として、「境目之城々ハ近年破却之間、俄ニ被相動候故、詰城皆々被責落候つる」と弁解している。しかし、このとき激戦地となった最上・前線の畑谷城（山形県山辺町）は、貧弱といってよい山頂部に対し、均衡を欠く大規模な堀で山麓を区画した異様なプランを呈する。この区画を貫通する道は、置賜と最上をつなぐ築沢通・中越道が最も近づく地点にできたバイパスであるので、このプランは「詰城」的性格を持たない、境界警護のための「境目之城」の性格に対応したものと評価できる。しかもそれを実現した技術体系は、織豊系城郭の特徴を含まない。長大な遮断線が山麓の平地部分に展開し、山上部分とアンバランスをきたしている同期の類例には、岩手県北上市の二子城・岩崎城、石田明夫氏が解明された上杉の阻塞群などがあり、今日なお大規模な惣構の遺構を残す長沼城（福島県長沼町）にも類似を認められる。一方、おそらく織豊系城郭の影響を受けて、定型化した虎口も同期に見られる。戸沢による街道封鎖の拠点・石神館（秋田県協和町）の土塁による外柵形はその代表例であるが、同時に使用された大館城（同町）では、掘り込み式の柵形が、土塁で固め定型化したそれと並存している。掘り込んで方形に整えた虎口は、戸沢領の他の城館跡でも確認でき、このような系譜の上に織豊系の築城技術が接木されているのである。なお、この大館城は、